

みや
雅び心・遊びごころ……

飛驒高山の飾り物



発行 社団法人 高山市文化協会 編集 高山市教育委員会
高山市飾物同好会

二百年の歴史を持つ

飛驒高山の飾り物

高山飾物同好会

日本全国でただ一か所、飛驒高山にだけ息づいている飾り物は、天明七年（一七八七）時の高山郡代大原正純が崇敬していた陣屋稻荷の初午祭に際して「二十四孝」の飾り物を奉納したのが、一番古い記録とされています。大原紹正、正純父子は、いわゆる大原騒動で、悪代官の張本人のように言われますが、飛驒で最初の俳諧結社「水音社」を創められたり、この飾り物を奨励したり、飛驒の文化には非常な貢献をしました。紹正、正純父子は、共に陣屋稻荷への信仰が篤く、父紹正の時代から飾り物奉納の習慣があったと思われる

ます。

高山町年寄り日記によりますと、文化年中（一八〇四〜一八一六）以降、毎年の様に陣屋稻荷へ飾り物を奉納した記録が見えますので、当時から飾り物は恒例になっていたと見てよいと思います。

ただ、当時の飾り物とはどんなものであつたかというのは、残念ながら具体的に分かりませんが、現在の大祭などの際に、地方の各神社から奉納された、五穀で画いた祝いの図の額とか、藁などで作った鶴亀といったたぐいのものではなかつたかと想像されます。

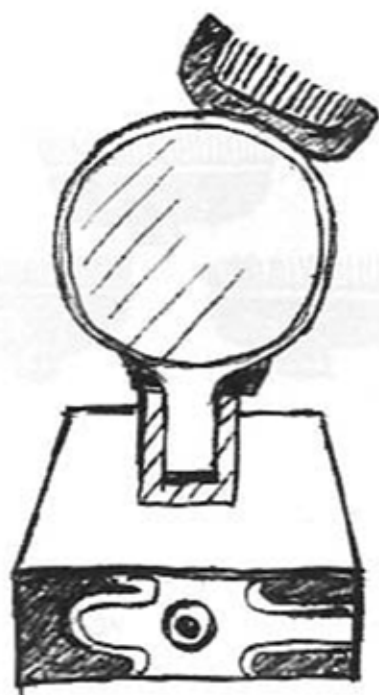
明治五年には、八幡神社に太々神楽（現在の太々神楽）が五日間執行され、町内十六か所で飾り物があつたと記録されており、その二・三の例から想像すると、極めて現在の飾り物に近いことがうかがえます。

例えば「琴の柳、ことぢ燕」とあります。これを想像して画いてみると、次のようなものではなかつたかと思われまます。

2



また「姿見の太鼓、櫛子の鶏」というのは、



といったかたちで諫鼓鳥を表現したと思われまます。

3

「紺屋ハケの松」は、染物バケを松に見立ててあったのではないでしようか。



飾り物は、その後次第に盛んになって、日清戦争凱旋祝賀、旅順陥落、高山線開通、市制施行、紀元二千六百年、平和憲法発布、立太子礼、御大典、市制記念や、例祭、大祭などに、多い時は一度に何百もの飾り物が出た記録があります。

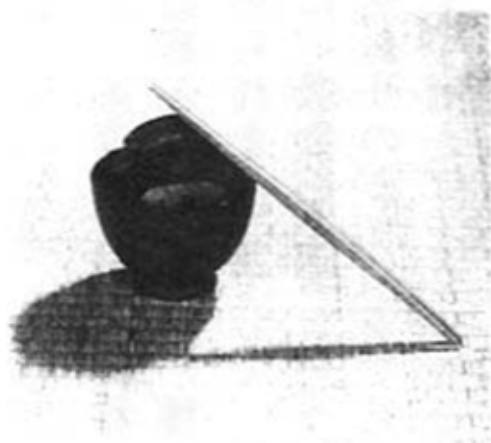
飾り物には大別して三種類があります。一つは「作り物」です。道具を使って、いかに実物らしく見せるように仕上げるか、たとえば、藁を丸めて猪に見せるとか、藁などや紙

などで、本物そっくりにかたちづくるやり方です。

二つ目は「判じ物」です。町村合併の時に大きな鉦を出して「大きくなった」といったものです。この判じ物は、たとえば高山の正統的な飾り物を俳句の味と見るならば、川柳感覚といえるかも知れません。

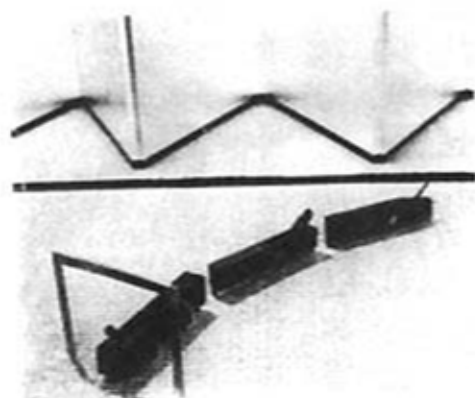
しかし、例にあげた明治初めの飾り物でも分かるように、高山の飾り物の特徴は、やはり「見立て物」にとどめをさします。

左の写真は、祝賀の提灯行列を表現して、丸い朱塗りの吸物椀と、箸で赤い提灯を表わした傑作です。

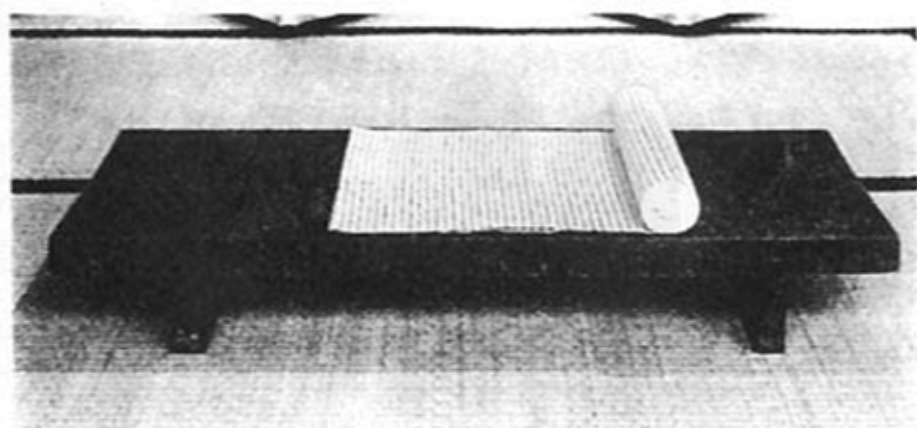


この例でもわかるように、道具は、なるべく同系統のもの、茶道具とか、食器とか、酒器とか、大工道具といった風にならぬ中から選ぶことが求められます。そして、前の例でもわかるように、吸物椀と箸という取合せでしかもごく自然ありのままの姿で見立てるのを最高とします。例えば、この箸を吊つたり、折り曲げたりしたら台無しです。あくまでもその器が本来使われていた普段のままであるのが理想です。

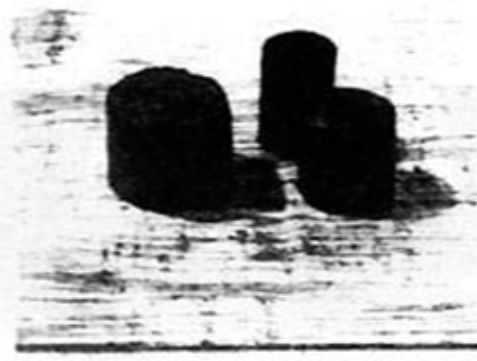
次の写真は「高山線電化促進」と題した飾り物です。差し金二丁で電柱を、戸みぞなどを削る溝鉋（みぞかき）を並べて電車に見立てたものです。



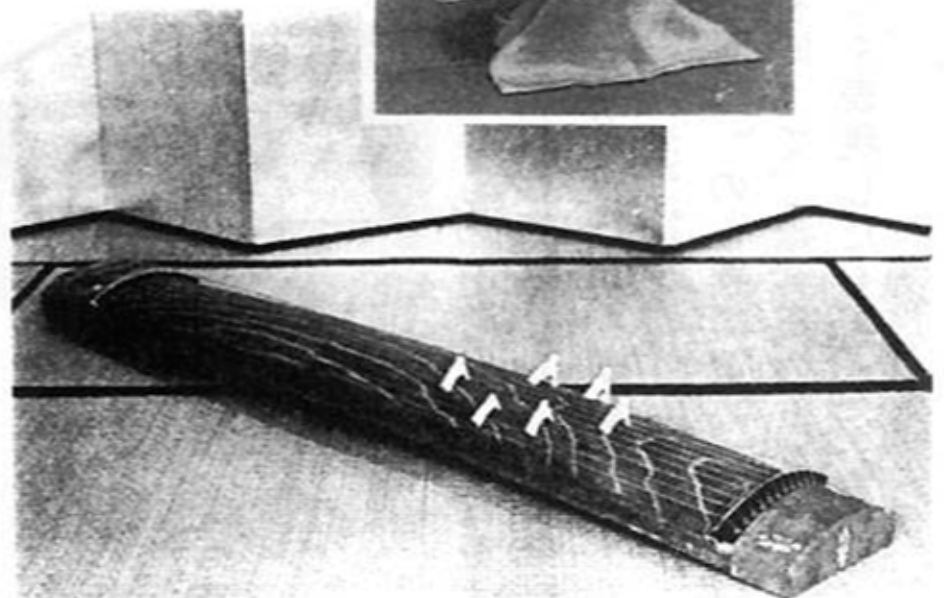
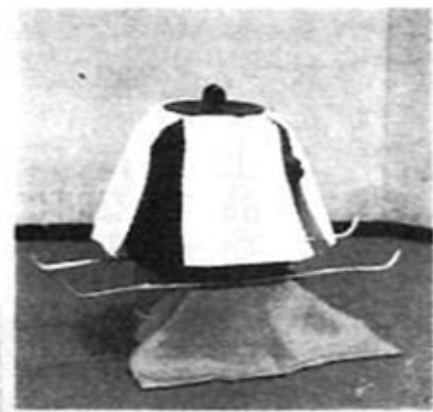
次は「新憲法発布記念」の時のもので、裁縫（たいはぎ）の裁ち台を机に見立て、白緋（しろひ）の反物を少しひろげて憲法の一巻をあらわし、かすりの文様を、憲法の文字のように見せたものです。



こんどは「市制三十周年記念」の飾り物で「年輪」と題するものです。着物の畳紙を敷いた上に、角帯の巾の違う三本を巻いて据えて、三十年の年輪を表現しています。



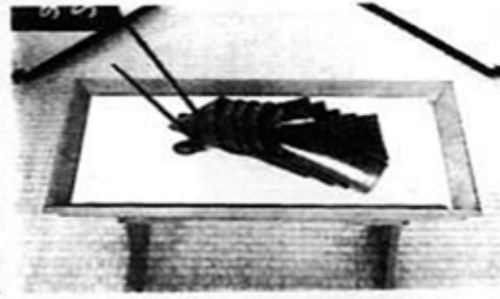
「岐阜国体」のときの飾り物では「短距離競走」を、琴と琴柱で見立てたものがありました。琴の全面をトラックに、糸をラインに、琴柱を選手に見立て、琴柱を少しななめ前かがみにすることによって、ゴール間際のせり合いを表わしています。



今までの例は全くの「見立てもの」に近いものですが、多少の手を加えて面白さを出したものもあります。

前の上図は、茶釜に、茶巾を四方に掛けて蓋をし、茶杓を前後に添えて、祭の時の鳳輦をかたちどっています。

次の例は、祝儀物の海老^{えび}です。春慶塗のおしほり入れを五枚重ねて、春慶の箸^{はし}をひげに、茄子形の陶器の箸置きを目玉にして、おしほり入れの間に薄いおしほりの布を入れて、海老のかたちをよりリアルに表現しています。

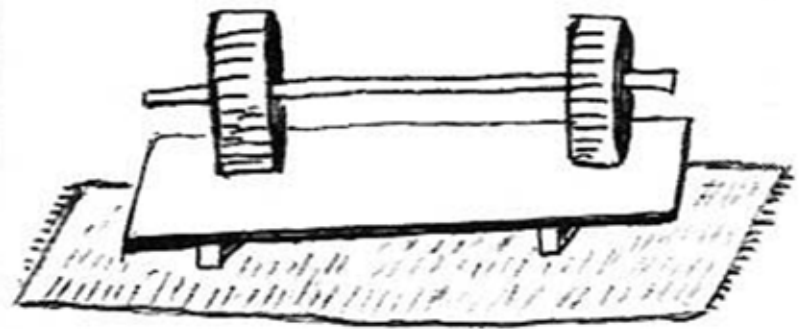


道具はなるべく良いものを使うことが望ましいのですが、必ずしも高価なもの、豪華なもの、上品なものを使うばかりが能でもありません。

やはり「岐阜国体」のときのもので、石臼と餅の延べ棒を使って、延べ板の上で、重量挙げのバーベルを表現したものです。

10

「紀元二千六百年」の時に、木^き鋏^さを立てただけで「金^{きん}鷄^{けい}」を表わし、神武天皇の弓の上のとびに見せてありました。



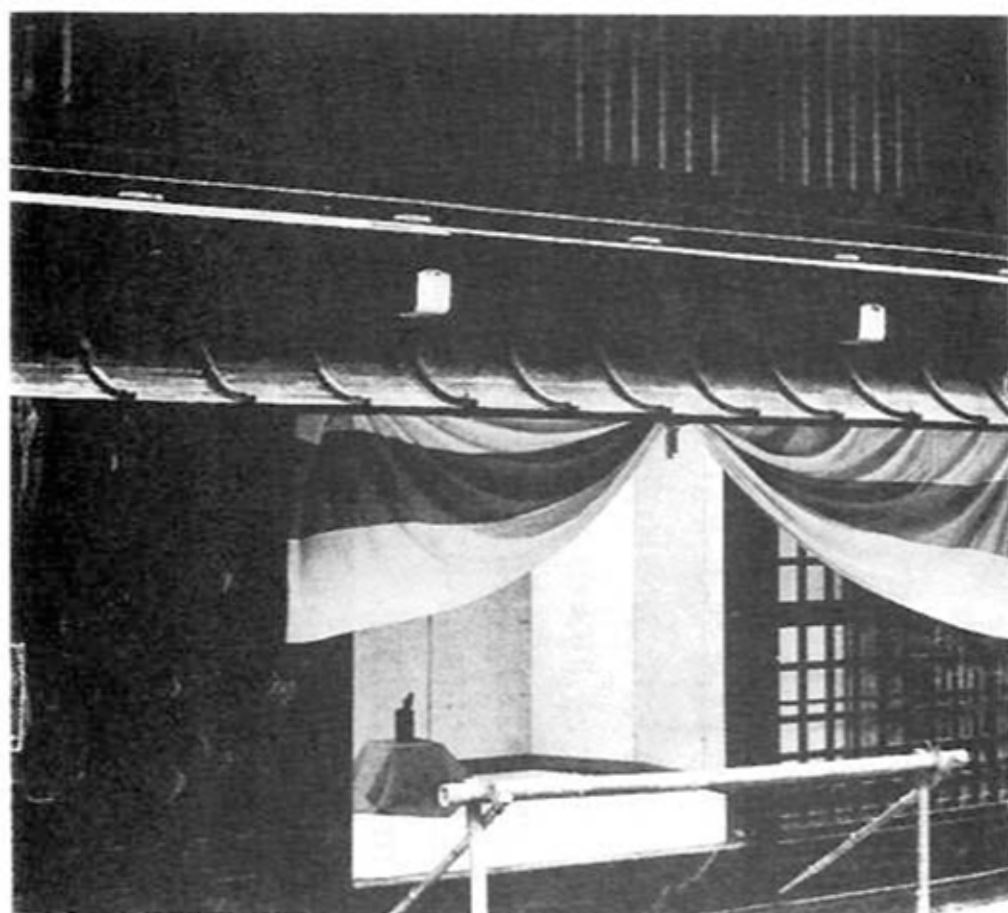
11

身近にある道具を使いこなすことが大切かと思われます。もう一つ身近なものの例として、塵取りと、和紙のはたきを使って「菊花」を表現したものもありました。



このように高山の飾り物は、祝い事に際して道具を見立てる大人の遊び、オブジェ感覚の競り合いといえます。

飾り物は、本来なら、銀屏風の前に毛せんを敷いて、外側は竹矢来で囲い、藪縄（やぶなわ）で結ぶのが正統かと思われますが、今ではそんな部屋が利用できる場所も少なくなりましたので、ショーウィンドーでも、ちよつとした店先でも飾れると思ひます。



日本中で高山にだけ残る飾り物の伝統を永く残して、優雅な遊びの世界に浸るのも、私たち市民のよろこび、誇りであり、つとめではないでしょうか。

「飾り物」概説

日枝神社の臨時大会を機会として

福田 夕 咲

昭和十年の日枝神社大祭の際の「飾り物」
についての感想

『福田夕咲全集』より

去年の秋十月、高山線全通式の祝典が挙行された時にも、高山全町に亘って、全通式に因んだ「飾り物」が催された。今年五月の日枝の大祭にも、型の如く、氏子各屋台組の組々で「飾り物」を飾ることは既に余興係の予定のプログラムに這入ってゐるさうである。

まだ文献を渉獵する機会を得なかつたので、「飾り物」の起源といふやうな考証めいたことには就ては一向に不知不案内である。

よくそれが、飛驒人の趣味の特殊なる一表現として、飛驒に発生したものでなく、或は役人衆の手を経て江戸から伝来されたものに

14

もせよ、または信仰関係や商取引等の接触から、名古屋方面、或は京阪地方から移入されたものにもせよ、飛驒人の頓才諧謔や小器用さに依つて特殊な発達を遂げつゝ、今日に至つたものであることは断言して憚らない。

「飾り物」と言つただけでは、果してそれが何を意味するものであるか、恐らく他国の人には徹底しないであらう。或は菊人形、朝顔人形の類ひと誤解する人もあらうし、またシヨウウインドーのマネキン人形などを連想する人もあるだらう。確か伊藤実業学校長の話であつたと思ふが、伊勢には、陶器を重ね合せて武者人形などを飾ることがあるさうである。

依つて茲に、日枝の大祭を機会として、他国の遊覧者達のため「飾り物案内記」といつた風に、見聞の一端を記述する。

「飾り物」は、大体「作りもの」と「判じもの」と「見立てもの」の三つに分けることが出来る。

『作りもの』と言へば、蚊帳や蒲団で山を作ったり、ばんどり（飛驒蓑）で猪を作ったり、また板人形など、呼ばれてゐるのは板に胡粉を置いて、それに眼鼻を画き、ほんもの、衣裳づけをしたりする程のものであり、『判じもの』は説明する迄もなく、大きな賽ころを作つて、これで『大祭』にきかせたり、薬鐘を火消し壺の上に乗せて『決して焼かん』と駄洒落る類ひのもので、今日の高山の人達はむしろ低級不劣なるものとしてさげすんでゐる。

然も私の、とほしき見聞に於てすら、もとはこの『作り物』『判じ物』が大半を占めてゐた。

然し昨今では『見立てもの』全盛で、例へば大小の柵を三つ重ねて、その上に漏斗を乗せ、これを国分寺の三重の塔に見立てるといつた風なものが流行してゐる。

『見立もの』の主要なる点は、材料をあまりこはさずに、なるべく原形に近く、手軽に

飾つて、ある目的物を髣髴せしめるといふことにある。つまり軽妙洒脱を第一とする。

言ふまでもなく『飾り物』は、『思ひつきの妙』と『飾りつけの巧』とがびつたりこなければならぬ如何に意匠がうまくとも、飾り方が上手でなければ、観るものを感嘆せしめることが出来ない。いくら飾り方が真に迫つてゐても、寄せ集めものなどの材料を以てしては、何の効果も得られない。

私は、今迄数度に亘つて『飾りもの』の審査員を仰せつかったので、その都度、随分念入りに見て廻つたが、この『意匠の妙と飾りつけの巧』が調子よく合致して、『これはいい』と感嘆せしめられたものは甚だ僅かである。

然しどの町内にも、それ／＼凝り屋があるものである。その人達が一生懸命に工夫して飾り立てるのだから、とり／＼におもしろい。私の記憶に残つてゐるもの、中、最も古いのは、確か明治三十三年、桜山八幡神社の臨時

大祭の時、氏子の各組々に割り当て、『東海道五十三次』の飾り物を催したことがあった。この十中八九までは『つくり物式飾り物』であったが、その中に、『吉田の宿場』に当たった組が勾欄付きの二階の上に緋縮緬の首輪をはめた『招き猫』の玩具を据えて、『吉田通れば二階から招く』の俗謡をきかせたものがあった。

また、いつかの凱旋祝ひの飾りもの、中に弓張付きの丸提灯を斜に立て、『地球儀』を飾つてみた町があった。また御成婚式の時だったのが、『大きい筆と刷毛』とで、『高砂の尉と姥』を暗示してゐるものがあった。

またある時の鎮火大祭には、『水籠に消し止めの札』を吊りさげて、『風鈴』に見立て、涼しい夏座敷を連想せしめたものや、同じく水籠を『蜂の巣』に見立て草鞋にちよつと細工して蜂の飛んでゐるさまを飾つてゐる組もあった。同じ時であったかどうか、どわすれしたが『女持の蓑入れ』をちよつとひねって

蓑盆の藤の提手にはさむただけのものだが、その蓑入れの色合ひから、ぴんと尾をはねた調子が如何にもよく鶯のさまを髣髴せしめ、『鶯の身を逆さまに初音かな』の情趣があつたので、『鶯』として最高点をつけたが、あとで聞くと、作者のつもりでは鶯と見たのは『鳩』で、毛毳の上の吸殻の焼跡を豆に見立て、火防宣伝にきかせたのだとのことだったので啞然としたことがある。斯う持つて廻つたあくどい趣向はイヤ味に近い。

勘違ひの話なれば、ある時『洋火鏝を青毛毳の上に二つ』ならべて据えてあつたので、てつきり『番ひの鴛鴦』だと思つたら、それが『軍艦』のつもりだったといふので、大笑ひしたことがある。

この前、大正十三年の時の八幡の大祭には、矢張り各組抽籤で『百人一首』を飾つたが、題が題だけに極めて風韻の高い情趣の濃やかなるものが多かった。『さびしさに宿を立ち出で眺むれば』の歌に対して『茶托』をは

らくくと散らして、『落葉』に見立て、あるのがあった。趣向と言ひ飾りつけと言ひ、申分のない出来栄えであった。また『摺鉢を奥山に、摺粉木を鹿に』見立て、『奥山に紅葉踏みわけ……』を飾ったところもあった。

この間の高山線全通式の飾りもの、中では、『古い蓑入の吠を籠に、さしを棒に』見立て、『二托の重駕籠』に見立てたもの、及び『電気のスウィッチ』を、『転轍機』に見立てたものなどが出色であったと思ふ。

この外、私の面白く感じたものはいろ／＼あるが煩雑を避けて、敢て時と場所を略しその主なるものをあげてみると、いくつかの糊刷毛を相撲取りに、大きい糊盆を土俵に見立て、『土俵入り』を飾ったもの、『味噌セツカイ』で、道教へ鳥の『鶴鶴』を飾ったもの、碁盤と蚕座紙として、碁石を卵に、碁笥で蚕の蛾を飾ったもの、『南京豆の袋』を一寸ひねって『兎』としたもの、『木魚をどくろに、如意をさわらび』に見立て、『野晒し』を飾

ったもの、『かげづるの竹馬』、『釣瓶の竹馬』、『弁当箱を獅子頭』に、『風呂敷をゆたん』にみたてたもの、同じく『針さしに縫ひさしのきれをふわりかけて祭り獅子』に見立てたもの、『はかりの分銅を半鐘』に見立て、『火の見梯子』を飾ったもの、『琴を流れに、琴柱を水鳥』に見立てたもの、『袋を籠に、その紐を綱』として、『籠の渡し』を飾ったもの、『無雑作に』、『鉦を一丁』打ちこんだ、けで、『金鷄』の神話を飾ったもの、等、等、等、……とり／＼に忘れられぬ印象である。

古川の大祭を見に行った時、あまり趣向のきいた飾りものもなく、ぞんざいなもの、多かつた中に、天目茶碗で、『石燈籠』を飾ったのがあったが、鷄群の一鶴といった観があった。

昔は、『見立てもの、飾りもの』と言へばその題目も『三種の神器』か『三すくみ』か『鶴亀』かといった位の単調なのであったことを附記してこの稿を終る。

飛騨高山の飾り物

平成三年十一月三日 発行

平成十九年一月一日 復刻

発行 (社)高山市文化協会

編集 高山市教育委員会

高山飾物同好会

非売品